台大日本語文研究第 15 期
2008 年 6 月，頁 1-18
2008 年「台大日本語文創新國際學術研討會」（2008 年 5 月 31 日）特別寄稿

1910 年的夏目漱石與石川啄木

太田　登*

要旨

本稿以日本近代文學研究中被認爲是過去遺物一般存在的「文學史」研究爲基礎，並將重點擺在重新審視文學研究的方法。

本稿將針對處於政治性緊迫中，並造就百花齊放的文學種類以近代文學之姿越發成熟的 1910 年，夏目漱石與石川啄木的文學接觸點的意義層面上以文學史的觀點進行考察。

漱石文學立場之根本乃在於對現代文明採取批評家的觀察角度。此觀點由漱石自覺是都市漂泊者一事更加深化，並給予了年輕的文學世代很大的影響。而對於漱石的影響感受最敏感並加以吸收的啄木以〈時代閉塞的現狀〉之一評論與歌集《一掬之砂》使近代文學此一文學種類越發成熟外，並讓 1910 年此年成爲文學史上劃時代的一年。

關鍵詞：文學史研究、1910 年、文明批評家、都市漂泊者、文學種類

* 天理大學名譽教授

Natsume Souseki and Isikawa Takuboku in 1910

Ota Noboru*

Abstract

This essay is based on the methodology of “literature history,” which has been regarded as old leftover of the past in the research field of Japanese contemporary literature, and puts its focus on reexamination of the methodology of literal study.

This essay would point up the year of 1910, when varied literal genres were blooming and maturing in roles of contemporary literal works under the circumstances of political tension, in order to exam the meaning of Natsume Souseki and Isikawa Takuboku’s literal contact point from the point of view of “literature history.”

Natsume Souseki’s literature rooted in his observation angle as a critic of modern civilization. After Natsume Souseki had recognized himself as a city wanderer, this point of view turned to be deepened and provided the younger literal generation with critical influence. Isikawa Takuboku, who was affected by Souseki’s influence most profoundly, published his criticism “*Zidaiheisa No Genzyou*” and poetry collection *Ichiaku No Suna* in 1910. These two works of Isikawa Takuboku advanced the mature of this literal genre in contemporary literature, and above all, made 1910 as a critical year in literature history.

Key words: study of literature history, 1910, critic of civilization, urban wanderer, literal genre

* Honorary professor of Tenri University

1910 年における夏目漱石と石川啄木

太田　登*

要旨

本稿は、日本近代文学研究において過去の遺物のように見なされている「文学史」研究によって、文学研究の方法を問いなおすことを主眼とする。

本稿では、政治的に緊迫するなかで、多彩な文学ジャンルが近代文学として成熟の方向に展開する 1910 年における夏目漱石と石川啄木との文学的接点の意味について、文学史的な観点から考察した。

漱石の文学的立場の根幹は、現代文明にたいする批評家の視点であった。その視点は都市漂泊者という自覚によって深化し、若い文学世代に多大の影響を与えた。その漱石の影響をもっとも敏感に吸収した啄木は、「時代閉塞の現状」という評論と、『一握の砂』という歌集によって、近代文学としてのジャンルを成熟させるとともに、1910 年という年を文学史のうえで画期的なものにした。

キーワード：文学史研究、1910 年、文明批評家、都市漂泊者、文学ジャンル

* 天理大学名誉教授

1910 年における夏目漱石と石川啄木

太田　登

一、はじめに

かつて日本近代文学研究において、現在の文学研究ではもはや過去の遺物のように見なされている「文学史」論や「文学史」研究を文学研究の基盤として再生させる必要があるということを、「文学史における 1910 年の意味―文学研究をめざす人のために―」（台湾日本語文学会『台湾日本語文学報』18、2003 年 12 月）で論及したことがあり、文学史研究の試みとして、1910 年（明治 43）における文学史的意味を漱石と啄木との文学的交流をとおして考察した。

さらに、「都市漂泊者としての漱石と啄木」（『台大日本語文研究』第 5 期、2003 年 12 月）で、西行や芭蕉などの先人たちが求めた〈漂泊〉の系譜は、近代にあっては漱石と啄木が都市漂泊者としてその命脈を受け継いでいると位置づけたこともある。

したがって、本稿はそれらの論考をふまえて、あらためて 1910 年における漱石と啄木との文学的交差の意味について、文学史的に考察するうえから、論旨の展開において先行の拙論と重複することをあらかじめ断っておきたい。

二、日本近代文学史のなかの 1910 年

1910 年は、第 2 次桂太郎内閣のもと、大逆事件の発覚、韓国併合などというきわめて緊迫した政治的社会的状況であった。では、文学史のうえではどのような年であったのか。小田切進編『日本近代文学年表』（1993 年 12 月、小学館）を参考にしながら、この年の主要な文学的事象を列挙しておこう。

一月　島村抱月訳のイプセンの戯曲「人形の家」が『早稲田文学』に掲載。

二月　森田草平『煤煙』

三月　夏目漱石「門」(『東京・大阪朝日新聞』)、森鴎外「青年」(『スバル』) の連載、自然主義の影響を受けた歌集が多く刊行される。金子薫園『覚めたる歌』、前田夕暮の『収穫』、与謝野鉄幹の『相聞』など。若山牧水が短歌雑誌『創作』創刊。

四月　有島武郎、武者小路実篤、志賀直哉らによる『白樺』創刊、反自然主義文学の一翼を担うとともに、清新な美術雑誌としても注目された。徳田秋声「別れたる妻に送る手紙」を『早稲田文学』に発表、若山牧水の歌集『別離』。

五月　慶応義塾大学文科の機関誌『三田文学』が永井荷風主幹で創刊、荷風の「紅茶の後」連載はじまる。

六月　長塚節の農民小説「土」が『東京朝日新聞』に連載。

七月　森鴎外らの「夏目漱石論」(『新潮』)

八月　魚住折蘆「自己主張の思想としての自然主義」(『東京朝日新聞』) 魚住論文にたいする石川啄木「時代閉塞の現状」稿。

九月　川路柳虹の詩集『路傍の花』、吉井勇の歌集『酒ほがひ』、谷崎潤一郎ら東京大学文科生を同人とする第2次『新思潮』創刊。

十月　尾上柴舟「短歌滅亡私論」、漱石「思ひ出す事など」

十一月　谷崎潤一郎「刺青」(『新思潮』)、鴎外「沈黙の塔」と小山内薫訳のゴーリキーの戯曲「夜の宿」が『三田文学』に掲載。『白樺』でロダン特集、井上通泰、賀古鶴所らの「森鴎外論」(『新潮』)、啄木「一利己主義者と友人との対話」、抱月「思想と実行との距離」

十二月　啄木の歌集『一握の砂』、歌論「歌のいろいろ」

このように1910年は、劇文学、小説、評論、短歌、詩などの実に多彩な文学ジャンルが新聞・雑誌を中心とした出版ジャーナリズム

の制度化、組織化とともに、細分化、自立化しながら、近代文学として成熟の方向に大きく展開していた。

漱石研究者として著名な玉井敬之『夏目漱石論』（昭和 51 年 10 月、桜楓社）は、河上肇、西田幾多郎というすぐれた二人の思想家が「その学問的生涯の最初の礎石をもった時期が、明治四十二・三年であったということは、十分注意してよい事実だ」とし、明治 42 年、43 年という時期は明治創生いらいのさまざまな矛盾が体制的思想的にきわだち、「近代日本におけるもっとも緊張した一時期であった」と指摘している。かかる卓見にしたがえば、日本近代文学史における 1910 年は、自然主義の受容とその批判によって、それまでにない多様な作品・理論・批評を生み出し、きわめてアクチュアルな文学的状況にあったといえる。

さらにそのことは同時に、臼井吉見『大正文学史』（1963 年 7 月、筑摩書房）や瀬沼茂樹『大正文学史』（1985 年 9 月、講談社）の文学史家が論証するように、1910 年を大正文学史の起点とし、明治文学史の終点であるという近代文学史の問題と緊密にかかわる。つまり、日本近代文学史のなかの 1910 年は、「明治文学」と「大正文学」との結節点として重要な位置にあるということが明断できる。

この近代文学史における重要な結節点にあって、文学における多様なジャンルが近代文学として自立し、成熟したとすれば、その最大の功労者は誰よりも夏目漱石と石川啄木であったと考えられる。

三、漱石のなかの 1910 年

（一）「それから」から「門」へ

周知のように、1907 年 4 月、東京帝国大学講師などのすべての教職を辞し、東京朝日新聞社の専属作家となった漱石は、入社第一作の「虞美人草」を皮切りに、「坑夫」「夢十夜」「三四郎」「それから」と立て続けに新聞小説を連載することになる。「吾輩は猫である」から「それから」にいたる作品の展開は、そのまま作家漱石の誕生から成熟へといたる軌跡でもあった。

そうした作家漱石の誕生にもっとも密接にかかわるのは、「野分」（1907 年 1 月『ホトトギス』）という作品であった。「白井道也は文学者である」という書き出しではじまる「野分」の主人公白井道也は、「三度教師となって三度追い出された彼は、追い出される度に博士よりも偉大な手柄を立てた積もりでいる」。「道を守るものは神よりも貴し」という信念をもつ道也は、「筆の力」「人格の力」によって「天下の士の仕事」を成就しようとする。このような道也の文学観人生観は、「僕は一面に於て俳諧的文学に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやってみたい」（鈴木三重吉あて、明治 39 年 10 月 26 日）というように、あきらかに当時の漱石じしんの文学的立場を濃密に反映するものであった。

そしてその漱石の文学的立場の根幹にあったのは、なによりも現代文明批評の視点であった。「虞美人草」につづく前期三部作といわれる「三四郎」（1908 年 9 月～12 月）、「それから」（1909 年 6 月～10 月）、「門」（1910 年 3 月～6 月）にしても文明批評家としての漱石の視点が作品の展開に大きな比重を占めていることは明瞭である。めまぐるしく変動する日露戦後の都市空間へのきびしい批判意識は、「偉大なる暗闇」と称される広田先生の言動に統率されていることはあまりにも明白である。「それから」の代助には、経済至上主義の近代日本にたいする批判的視点が背負わされている。しかし旧制中学校からの友人である平岡から「不義」を問責され、長井家の地位と財産の礎を築いた父から絶縁された代助は、「自分の影を、犬と人の境を迷う乞食の群れの中に見出した」という〈漂泊者〉の立場に追い込まれる。職探しに外出した代助が真っ赤な世の中の回転を感じ、「代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗って行こうと決心した」という結末は、〈漂泊者〉になりきれぬ代助にたいする「漂泊でも好いわ。死ねと仰しゃれば死ぬわ」という三千代の批判に目覚めることによって、現実の社会に生きる代助がたとえ限定つきとはいえ傍観者的視点から実践的批判者の視点を獲得するにいたる予兆を

示している。

1910 年 1 月に『それから』を春陽堂から刊行した漱石は、前年 8 月に「それから」を脱稿した直後から胃痛に苦しみ、「面倒デ死ニタクナル」（8 月 20 日の日記）ほどの急性胃カタルの発作に見舞われる。後述する修善寺の大患につながる身体の不調のなかで、「不義」で結ばれた過去を背負う夫婦が東京で世間を憚るようにひっそりと暮らす物語ともいうべき「門」を 3 月から 6 月にかけて連載する。「山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた」夫婦は、「都会に住みながら、都会に住む文明人の特権を棄てたような」生活であった。しかし、それは「広さを失うと同時に、深さを増して」いた。現実の社会から隔絶された夫婦の生活ではあったが、「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体」のように、たがいに強い絆で結ばれていた。旧友の安井の風説を聞いた宗助が精神的不安から逃れるように、鎌倉の禅寺で「積極的に人生観を作りかえ」ようとする。結果としては、「父母未生以前本来の面目」という公案を解明することはできなかったが、むしろ平凡な日常の暮らしのなかに自分らしい生きかたを発見することになる。宗助の勤務先の動揺が一段落して「生き残った自分の運命」を顧みる最後の場面での、「本当にありがたいわね。漸くの事春になって」という御米と、「うん、しかしまたじき冬になるよ」と答える宗助の会話には、「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になった」夫婦の深い愛情が滲み出ているとともに、凡庸な都市生活者として生きてゆこうとする決心が読みとれる。

（二）「朝日文芸欄」の意義

『東京朝日新聞』に漱石を責任者とした「朝日文芸欄」が開設されたのは、1909 年（明治 42）11 月であった。自明のごとく、『文学論』（1907 年 5 月、大倉書店）、『文学評論』（1909 年 3 月、春陽堂）によって最新の学説を援用しながら英文学の本質を学問的科学的に分析しようとする英文学者漱石にとって、哲学、歴史学、心理学、社会学などの学際的な視点による実験的前衛的な新しい小説の方法にたいする意欲もきわめて旺盛であった。したがって、「文芸とヒロ

イック」（1910 年 7 月 19 日）に明断するように、「現実曝露の悲哀」に固執し、「ヒロイックを軽蔑する」自然主義派の文学的立場には対抗的であった。「艇長の遺書と中佐の詩」（1910 年 7 月 20 日）も、佐久間艇長の遺書を名文と評した「文芸とヒロイック」を受けて、広瀬中佐の「詩を俗悪で陳腐で生きた個人の面影がない」という断罪に等しい批判には、〈信義〉を重んじる漱石の人間観が躍如としている。さらに、「イズムの功過」（1910 年 7 月 23 日）では、たんなる輪郭であり中味のないイズムによって、「人間精神上の生活」を支配されることは苦痛であり、「人生上芸術上、ともに一種の因果によって、西洋に発展した歴史の断面を、輪郭にして舶載した品物」である自然主義および自然主義者にたいして、「人生の全局面を蔽う大輪郭を描いて、未来をその中に追い込もうとするよりも、茫漠たる輪郭中の一小片を堅固に把持して、其処に自然主義の恒久を認識してもらう方が彼らのために得策ではなかろうか」と、痛烈な批判を投げかけている。

「朝日文芸欄」に間断なく執筆した如上の論調には、文学や人間の存在にかかわる本質的問題を平面的局部的にしかとらえることのできない自然主義文学にたいするアイロニカルな批評眼が徹底している。他人本位の一般的職業とは別に自我中心で自己本位を第一義とする科学者、哲学者、芸術家のような道楽的職業の意義を強調する「道楽と職業」（1911 年 8 月 13 日の講演）や、「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終わるものである」ことを、「真正なる凡ての芸術家の第一義とする所でなければならない」とのべる「文展と芸術」（1912 年 10 月）などの主張に貫通する芸術観は、「朝日文芸欄」の基本的性格にゆるぎない指針をもたらしただけではなく、自然主義文学の思潮にあきたりない武者小路実篤、志賀直哉らをはじめとする新世代の文学者に多大の影響を与えることにもなった。[1]

[1] 武者小路実篤は「「それから」に就いて」（『白樺』1910.4）で、「それから」の代助を明治 40 年代の青年知識人として同時代的に分析している。

（三）修善寺の大患と「思ひ出す事など」

「門」の新聞連載中から身体の不調を自覚していた漱石は、脱稿後まもなく長与胃腸病院で検査を受けた。胃潰瘍の治療のために1910年6月7月と入院生活が続き、8月上旬に転地療養のため修善寺温泉にでかけた。そして8月24日の夜、大吐血のため30分ほど人事不省に陥るという危篤状態に見舞われた。いわゆる修善寺の大患と呼ばれる危機のなかで、「生死二面の対照のいかにも急劇でかつ没交渉なのに深く感じた」漱石は、前期三部作で開示した文明批評家としての視点をより成熟させる方向にあった。

すでに拙稿「都市漂泊者としての漱石と啄木」(『台大日本語文研究』第5期、2003年12月）で論及したように、修善寺の大患から一年後の1911年8月の関西方面への旅行は、生死の境をのりこえた漱石にとって自己本位の生きかたをとらえなおす「旅」となった。その「旅」の体験をふまえて書かれたのが「行人」(1912年12月～1913年11月）であった。深刻な孤独感、極度の神経衰弱、そして胃潰瘍の再発という悪条件のもとで書かなければならなかった漱石の内面世界は、そのまま「行人」の一郎の孤独と不安につながるものであった。自己本位の生きかたを徹底すればするほど現実世界から逸脱していかざるをえないという不安と焦燥におびえる一郎は、近代文明の毒を一身にあおいだ時代の犠牲者でもあった。ほぼ半年近くの中断後、最終章の「塵労」に取りかかった漱石は、「私は今道に入ろうと心掛けています。たとい漠然たる言葉にせよ道に入ろうと心掛けるものは冷淡ではありません」(和辻哲郎あて、大正2年10月5日）という心境にあったが、「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」という一郎の絶望的窮地とは無縁ではなかった。また「神は自己だ」「僕は絶対だ」「絶対即相対」というように幾重にもねじれた一郎の煩悶や矛盾は、「一切の重荷を卸して楽になりたい」という心境にいたるが、これも生死の境を彷徨した修善寺の大患が大きく左右していたといえる。

その意味では、修善寺の大患体験をふまえた「思ひ出す事など」（1910 年 10 月 29 日～1911 年 4 月 13 日）は、漱石じしんの内省の声を聞くことができる貴重な自己省察の記録であるといえよう。

たとえば、「余はうとうとしながら何時の間にか夢に入った」ではじまり、「見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて来た」でおわる第 22 章の夢の話は、ウィリアム・ジェームズの死をきっかけに『多元的宇宙』に思いをめぐらせる漱石じしんの無意識的世界を象徴している。「行人」の「塵労」の第 15 章では、スピリチュアリズムに関心を寄せる一郎が描かれているが、ここにも修善寺の大患体験ひいては「思ひ出す事など」の内省によって深化した漱石の生死への意識が透徹している。

すでに石崎等『漱石の方法』（1989 年 7 月、有精堂出版）が論及しているように、「修善寺の大患にもし思想的な意義があるとすれば、それは漱石の〈時間〉に対する哲学的な探求の出発点になったということ」は明白であり、「『思ひ出す事など』は修善寺の大患にもとづく〈死〉と〈時間〉に関する理念と実在がみごとに渾融した思想的な随筆」であることは疑う余地がない。大患以後の作家漱石にとって成熟から円熟への発展を可能にした後期作品をより精密に読むためにも、「思ひ出す事など」に表出された 1910 年における精神世界との対話こそ重要視する必要があるといえる。

四、啄木のなかの 1910 年

（一）朝日新聞社への入社と漱石との出会い

1908 年 4 月、「文学的運命を極度まで試験する決心」で北海道から上京した啄木は、創作的生活の苦闘を経て、翌 1909 年 3 月に東京朝日新聞社に校正係として入社することができた。1906 年に母校の小学校で代用教員をしていた啄木が藤村の「破戒」や漱石の「坊つちやん」などの新作を読み、小説を書くことを決心したことはよく知られているが、入社後の啄木は、校正係として朝日新聞紙上に連載される漱石作品と向き合うことになる。いわば漱石作品の最初の

読者として、「それから」の代助や「門」の宗助たちの都市生活者としての屈折した心理に共感を覚えつつも、その「人生に対する放擲的態度」(宮崎郁雨あて、明治 43 年 4 月 12 日)には批判的な啄木であった。

その啄木が漱石の文学観人生観からあるべき都市生活者の生きかたを積極的に摂取しようとした契機は、二葉亭四迷の存在であった。もともと文学者としての人生的態度において、文学と実行という問題が切実な課題であった啄木は、漱石よりも二葉亭という文学者に親近感を抱いていた。[2]その啄木が入社直後の 1909 年 5 月にロシアから帰国の途上に客死した二葉亭の全集の校正に実質的にかかわるようになったのは、1910 年 4 月からであった。全集の校正業務をとおして漱石と出会う日がついに啄木に訪れた。

時に 1910 年 7 月 1 日、長与胃腸病院に入院中の漱石を見舞った啄木は、『二葉亭全集』第 2 巻の編集にかかわってツルゲーネフの短編「けむり」のことを話題にした。5 日にふたたび病気見舞いと社用を兼ねて訪れた啄木は、「けむり」が収録されたC・ガーネット訳『ツルゲーネフ全集』第 5 巻を漱石から借用している。

漱石の知遇をえた啄木が、同時代の敬愛すべき文学者として漱石の存在にどのようにかかわっていくかについて、節をあらためてのべたい。

(二)「野分」から「時代閉塞の現状」へ

このように東京朝日新聞社を媒介として漱石の知遇をえた啄木は、当然ながら漱石が主宰する「朝日文芸欄」の動向に無関心でいることはできなかった。8 月 22 日、23 日の「朝日文芸欄」に掲載された青年哲学者魚住折蘆の「自己主張の思想としての自然主義」は、大逆事件以後の時代思潮に強い関心を寄せていた同世代の啄木にとっ

[2] 啄木の二葉亭に関する言説は多いが、5 月 15 日の日記で、「文学を嫌い―文士と言われることを嫌いだつた」二葉亭のことが理解できないという同宿の金田一京助にたいして、「憐れななるこの友には人生の深い憧憬と苦痛とはわからないのだ」「予は二葉亭氏の死ぬ時の心を想像することができる」と、二葉亭の死の文学的意味に深い理解を示している。

て、きわめて刺激的な評論であった。前述のように自然主義の文学思潮にあきたりない若い文学世代の問題意識や文学的感性を刺激する「朝日文芸欄」に啄木もまた積極的に参入しようとした。「強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察」という副題をもつ「時代閉塞の現状」は、魚住の自然主義論を批判しつつ、「国家」と「強権」との関係を鋭利に分析した評論であった。

すでに拙稿「「野分」論―「現代の青年に告ぐ」の演説をめぐって」（玉井敬之編『漱石から漱石へ』2000 年 5 月、翰林書房）で論及したように、「時代閉塞の現状」の思想的文脈には「野分」の主題と密接にかかわる論点がある。「現代の青年に告ぐ」という白井道也の演説に「野分」の主題は集約されているといえるが、学問と見識によって血肉化した「理想」をもって文学の大道を歩むことを現代の青年たちに訴える文学者白井道也はすぐれた文明批評家でもあった。その道也のメッセージが文学青年の高柳周作の胸中に確実に受けとめられたことで、「野分」という作品世界は完結することになるが、かつてその少年時代に文明批評家、時代の先覚者として崇拝した高山樗牛の個人主義をのりこえ、明治の青年こそ「明日の考察」に傾注しなければならないと主張する啄木の視角には、「社会参加」への強固な意志を主張する道也ならぬ漱石の文明批評家としての存在が鮮明に投影していたはずである。生前未発表となった「時代閉塞の現状」が「朝日文芸欄」に掲載されることを念じて執筆されたことは、なによりの証左であろう。[3]

（三）短歌滅亡論と『一握の砂』

近代短歌史における 1910 年は、「明治文学」と「大正文学」との重要な結節点であったように、近代短歌の成立にかかわる分岐点でもあった。「朝日文芸欄」に掲載されることを期待していた「時代閉塞の現状」は生前未発表におわったが、社会部長渋川柳次郎の抜擢

[3] 猪野謙二「日本の思想家・漱石」（1962.11）は、漱石と啄木こそが相反する立場でありながら、「日本の近代そのものが内包する思想的難問の核心に迫りえた文学者だったといえる」と指摘している。

によって翌 9 月 15 日から啄木を選者とした「朝日歌壇」が設けられることになった。選者という仕事は、大逆事件以後の時代閉塞のなかで生きている民衆の声や心にふれることのできるかけがえのない機会を啄木にもたらした。そのことによって啄木は短歌という表現の意味をとらえなおすことができた。

そうした啄木に衝撃を与えたのが、周知の尾上柴舟の「短歌滅亡私論」（1910 年 10 月『創作』）であった。柴舟は当時の自然主義思潮の影響を受けて、「短歌の形式が、今日の吾人を十分に写し出だす力があるものであるかをと疑ふ」という立場から、「短歌の存続を否認しよう」と提起した。この柴舟の滅亡論にたいして、啄木は「一利己主義者と友人との対話」（1910 年 11 月『創作』）で、「いのちの一秒」を表現するには、「形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ」という独自の短歌観によって、性急な滅亡論に反論した。

すでに拙著『日本近代短歌史の構築—晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄—』（2006 年 4 月、八木書店）で論証したように、1910 年 12 月に刊行された第一歌集『一握の砂』の成立は、短歌滅亡論議に触発された短歌にたいする啄木じしんの危機感と深くかかわっていた。

1　東海の小島の磯の白砂に
　　われ泣きぬれて
　　蟹とたはむる
2　頬につたふ
　　なみだのごはず
　　一握の砂を示しし人を忘れず
3　大海にむかひて一人
　　七八日
　　泣きなむとすと家を出でにき
4　いたく錆びしピストル出でぬ
　　砂山の
　　砂を指もて掘りてありしに

5　ひと夜さに嵐来りて築きたる
　　この砂山は
　　何の墓ぞも
6　砂山の砂に腹這ひ
　　初恋の
　　いたみを遠くおもひ出づる日
7　砂山の裾によこたはる流木に
　　あたり見まはし
　　物言ひてみる
8　いのちなき砂のかなしさよ
　　さらさらと
　　握れば指のあひだより落つ
9　しつとりと
　　なみだを吸へる砂の玉
　　なみだは重きものにしあるかな
10　大といふ字を百あまり
　　砂に書き
　　死ぬことをやめて帰り来れり

この『一握の砂』の冒頭にある「砂山十首」からも理解できるように、一人の無名の都市生活者を主人公とした漂泊の物語を造型することに歌集の主眼があった。漱石がその小説おいて都市生活者の心理的な陰影をきわめて微細かつ鋭利に描出したように、啄木もまた構成や編集および三行書きの表記に工夫を凝らした『一握の砂』という歌集によってそのことを可能にした。そのことが可能であったのは、短歌滅亡論による危機感を内発的にとらえなおし、短歌にとって近代とはなにか、という根源的な問題を真摯にうけとめたからである。その意味において『一握の砂』は、都市漂泊者としての哀歓を歌いあげた最初の近代歌集であった。と同時に『一握の砂』は、短歌を近代文学のジャンルとして成立させた最初の歌集であったともいえよう。

五、漱石と啄木とをつなぐ 1910 年

啄木は「明治 43 年中重要記事」のなかで、「思想上に於ては重大なる年なりき。（略）社会主義問題これなり。」と書き、「文学的交友に於ては、予はこの年も前年と同じく殆ど孤立の地位を守りたり。（略）夏目氏を知りたると、二葉亭全集の事を以て内田貢氏としばしば会見したるとは記すべし」と特記している。大逆事件以後の啄木がその思想的展開のうえで、いかに漱石という同時代の知識人の存在を意識していたかが理解できる。

すでに国崎望久太郎が『増訂啄木論序説』（1966 年 1 月、法律文化社）で綿密に論証しているように、啄木が「一利己主義者と友人との対話」で問題にした現代社会における人間の不安、虚無、絶望は、「それから」の代助の生きかたそのものに関係が深い。もとより代助の生きかたには漱石じしんの「自己本位」を第一義とした人間観人生観が色濃く投影しているが、漱石が生涯の課題としたエゴイズムの問題を自己の問題として痛切に受けとめつつ、漱石よりも世代的に若い啄木は漱石の文学的立場をのりこえ、より国家と対峙する民衆の立場にたつ必要があった。

漱石の影響を受けつつ、自己の思想的言語的エネルギーを傾注して書いたのが「時代閉塞の現状」であったが、その思想的文脈は明治の青年啄木から発信された漱石へのメッセージとして読みとることも可能である。

かくして漱石と啄木とをつなぐ 1910 年は、漱石が小説を、啄木が短歌を、それぞれ文学的ジャンルとして成熟、自立させることによって、文学そのものを近代文学として大きく飛躍させるという画期的な意味があった。漱石じしんは『文学評論』の序言で、「文学史もまた科学的なものでなくてはならぬ」「文学史の如きは全く科学的に成立する」「文学の批評または歴史は科学である」という前提を強調している。その前提をふまえて、英文学者でもあった漱石は「文学史が立派な一個の科学」とし、「生命のある文学史」をめざしたが、漱石と啄木とをつなぐ 1910 年は、日本近代文学史に広がりと奥行き

をもたらし、ゆるぎない文学史の道標となった。

【付記】漱石と啄木の文学史観については、より緻密な検討が必要であるが、後日の課題としておきたい。本稿は「2008 年台大日本語文創新国際学術研討会」（2008 年 5 月 31 日）における講演の草稿を補訂したものである。論文執筆の機会を与えていただいた編輯委員会の各位にこころから感謝申しあげる。